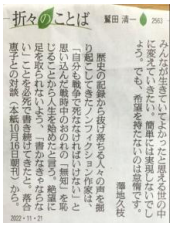
「折々のことば」澤地久枝さん

写真は朝日新聞 21 日朝刊「折々のことば」。澤地久枝さんの心に響く「ことば」が紹介されている。歴史の記録から抜け落ちる人々の声を掘り起こしてきたノンフィクション作家は、「自分も戦争で死ななければいけない」と思い込んだ戦時中のおのれの「無知」を恥じることから人生を始めたと言う。絶望に足を取られないよう、「書かなきゃならない」ことを必死で書き続けてきたと。このことばは、10 月 16 日朝刊の澤地さんと落合恵子さんの対談から。対談を抜粋して紹介する。[澤地さんの『昭和とわたし』(文春新書)は、約 50 年にわたり発表してきた著作から文章を集めた 1 冊です。旧満州での幼少期や、ノンフィクション作家になってからの様々な人との出会いがつづられています]


折々のことば　鷲田清一　2563

歴史の記録から抜け落ちる人々の声を掘り起こしてきたノンフィクション作家は、「自分も戦争で死ななければいけない」と思いこんだ戦時中のおのれの「無知」を恥じることから人生を始めたと言う。絶望に足を取られないよう、「書かなきゃならない」ことを必死で書き続けてきたと。落合恵子との対談（本紙10月16日朝刊）から。

澤地久枝

みんなが生きていてよかったと思える世の中に変えていきたい。簡単には実現しないでしょう。でも、希望を持たないのは怠惰です。

2022・11・21

つづるのは、歴史に埋もれる人の声

澤地久枝さん

14歳で終戦 無知だった恥ずかしい自分が原点

枠外れた幼少期 救ってくれた女性たちを作品に

落合　澤地さんが女性として、書き手として、どのように生きてこられたのかが詰まっています。『妻たちの 2・26 事件』では、刑死や自決をした将校の妻たちが、事件後に歩んだ人生を記録しています。澤地さんが書かなければ埋もれていた人たちの声がたくさんある。

澤地　私は終戦時、14 歳でした。当時は自分も戦争で死ななければいけないと思っていた。本当に恥ずかしいことです。恥ずかしい記憶は捨てられない。私の戦後、私の人生は、無知だった恥ずかしい自分がスタートなっているんです。自分の声で伝わるもの以外に左右されたくない。携帯も持ちません。この年になったら時代遅れになってもいいと思っているわけね。自分がつかんだもの、自分の手の中にあるものしか信じられないんです。落合さんはものすごく忙しいのに小説を書いていて、立派よね。

落合　小説があるからやっていられるかもしれません。私は子どもの本の専門店「クレヨンハウス」を主宰していますが、反戦や脱原発を訴える集会に参加して話すことも多い。でも、大声をあげるのも、人前で話すのも苦手です。小説の世界があるから、音の良くないハンドマイクで叫ぶこともできる。自分が好きなことをできる社会を作りたいから、好きでないことをあえてしているのかもしれません。

澤地　私は小説は書けないのよね。瀬戸内寂聴さんに「私は小説は書けない」と言ったら、瀬戸内さんは「そうよ、あなたはうそは書けないから」とおっしゃった。私は自分が書けること、どうしてもこれは書かなきゃならないということを書きます。それは優れたものにはならないかもしれないけれど、仕方ないんですよ。それが私だから。みんなが生きていてよかったと思える世の中に変えていきたい。簡単には実現しないでしょう。でも、希望を持たないのは怠惰です。自分の辞書があるとしたら、絶望という言葉は削ってしまいたい。

(2022 年 11 月 23 日)